

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
 カトリック仙台司教区事務局
 TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
 義援金振替口座：02260-9-2305
 名義：カトリック仙台司教区本部事務局

復興支援に各地からベースに来ていただき、ボランティア活動を展開する一方で、被災地にある小教区も、復興支援活動に、全国の方々のご協力をいただきながら、全力を尽くし努力しています。「4→6・45通信」は、その活動を皆さまと分かち合うために発刊されました。今回の第2号は、岩手県四ツ家教会と福島県いわき教会、同じく福島県の松木町教会の活動のご紹介をいたします。皆さまも、私たちの教会もこんな活動をしている、というニュースをお知らせください。

「四ツ家教会の支援活動の歩み」

委員長 戸澤恭子

千年に一度とも言われる大震災、事実の凄さがわかるほど、最初はどの人も何をしたらいいのか分からない、でも何かをしなければ申し訳ないという気持ちでした。

初めの10カ月は、被災者のためにと信者みんなで、教会に物資を集め、自家用車や軽トラであちらこちらの避難所に届けました。風呂に水を満たすのに、スプーンで水を入れているような思いでした。

時間は流れていくのに動く人が集まらない……。それでも、市内3つの教会に呼びかけ、月3回のペースで平均5人として今まで延べ400人が実働者として活動に携わったということになります。活動費は多くの人からいただきましたが、「朝8時に出て夕方5時に戻る」ことが、若い人には仕事、年配の人には体に…と、いろいろ差し障りがあり、人数は増えません。全国からのボランティアも少なくなっています。復興までせめてあと3年、被災県として真剣に考えなければと思います。多くの皆さんに活動の内容をこれからはもっと詳しくアピールして、要員を増やして、祈りながら楽しんで続けたいと願っています。

今まで私たちは「傾聴」を柱に手芸、歌、体操、プロ級の方に頼んで手打ちそば作り、包丁砥ぎ、かつての国語の先生には文学作品鑑賞の仕方をお願いしております。毎回、昼食は持参してみんなで一緒にいただくのですが、これは家族を失った一人暮らしの人たちは、特に喜ばれます。しかし一方では、いつまでも甘えられないという言葉も聞かれます。

活動してきた私たちも平均年齢70歳、疲れも出てきたので回数を減らす



うかという話も出てきました。しかし去年の11月、震災後まもなくから宮古ベースに支援に入っておられる札幌教区から、「岩手」に応援支援の要請があり、月1回2人が出かけています。この2年2ヶ月、カリタスジャパンの誠実な活動に対して、宮古、大槌、釜石、大船渡ともに「どこのボランティアよりカリタスさんがいい、やめないで！」と言われているそうです。宮古に入った札幌教区のボランティアは一人1回平均5日、延550人になるとのことです。

仙台教区としても「今こそ弱い立場の人に力を添える、その時です」。これは、新教皇様の願いでもあります。力を合わせてこの苦境を乗り越える力になりましょう。

「砂子田さつき祭を終えて」

チーム平・堂根 佐々木三代子

風薫る5月26日、いわきカトリック教会のボランティアグループ「チーム平・堂根」はボランティア先の内郷雇用促進住宅で、第3回砂子田（すなごだ）さつき祭を開催しました。

好天に恵まれ、11時30分の開会の挨拶ごろから、通常のお茶のサロンではお会いできない若いご家族や男性たちを含め大勢の人が、各テント前に長い行列を作っていました。

テントでは、神奈川県大和教会から来てくださった協賛チーム「大和サポート」が、ブラジル産ソーセージのホットドッグ、フィリピンのココナツ餅を、会津若松から参加の「チーム赤べこ」は、評判の焼きそばを準備しました。また、今回、初参加の聖ビンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会のシスターたちは、神戸からはせ参じてくださり、当地には珍しい関西風お好み焼きで、皆さまの興味をそそっていました。



そして私たち「平・堂根チーム」は、お茶のサロンに集う津波被害を受けた2つの地区の方々・久ノ浜地区と豊間地区の二手に分かれ、久ノ浜地区は五目すいとんと玉こんにゃく、豊間地区はじゃがバターに挑戦しました。(写真左は五目すいとんに奮闘する久ノ浜地区の方々、右はじゃがバター作りに工夫をこらす豊間地区の方々)。



ほどなくイベントも始まり、まず、景気づけにダルクのメンバーの方々の「飯豊（いいとよ）権現太鼓」が威勢のよいかげ声とともに打ち鳴らされました。ズーンとお腹の底まで響いてくるすばらしい太鼓でした。続いて神奈川県大和教会のラテンアメリカの子どもたちによるかわいい民族舞踊にも、大きな拍手が送られました。そして、今回は特別に、いわきに江戸時代から伝わる「じゃんがら念仏踊り」のチームも参加して下さり、伝統の「じゃんがら」の踊りを見せてくださいました。

一方、木陰のブルーシートでは、仙台から来てくださったシャトル聖パウロ修道女会のシスターたちが、子供服、絵本、おもちゃなどのミニバザーを開いて、若いママと会話が弾んでいました。

締めくくりは、このイベントの大人気、景品をかけた「じゃんけん大会」です。今では子どもばかりか大人も参加して、白熱しています。受けて立たれる平賀司教様も気合いが入り、「本気でいいね！」と臨まれたのですが、前回の10人抜きとはならず、次々に交代する人たちに、笑いの渦がわき起こりました。

最後に、今回「平・堂根チーム」が会津産こしひかり390キロを取り寄せ、内郷雇用促進住宅の皆さまに、一袋一升ではありますが、格安の300円で提供しました。

すべてのイベント終了後、一同はいわき教会に集まり、平賀徹夫司教様主司式



の感謝のミサに参加し、お説教で「私たちは、神様の愛に駆り立てられ、今日は各地から集まって来ました」とのお言葉を心にとめ、11月の再会を約束し、おのおの帰途につきました。

「心一つになれたバザー」

松木町教会「愛の支援グループ」 鈴木キミ子

5月25日(土)宮代仮設集会所において「心の復興」へ“小さな手をつなごう!!”のテーマで、バザーを開催しました。このイベントは、浪江町・宮代仮設住宅自治会と私たち松木町教会「愛の支援グループ」が共催したものです。

福島原発事故で避難している浪江町の方々が宮代仮設住宅に入られ、私たち松木町教会の「愛の支援グループ」はお互いに、1年8か月継続して互いに支え合ってきました。そうした中で、避難されている同じ町民やバラバラになっている家族などが共に集い、元気になれるようなイベントをしたいと考え、また、宮代や瀬上の地域の方々との交流も願っていました。今回のイベントは、神さまが、その願いを「バザー」のイベントという形でプレゼントしてくださったものと思います。



当日は、天候にも恵まれ、会場には予想もできなかったほどの人、ひと…。

売り場では、宮代仮設住民とボランティアさんがごちゃまぜで働き、たくさんのお客さまを心からの笑顔で、もてなしました。また、大勢の子どもたちが集ってくれたことは、みんなの大きな喜びでした。子どもたちの参加で、互いに笑顔、互いに元気になりました。宮代仮設には、子どもが一人も住んでいないため、宮代仮設の方々にとって、どれほど元気をいただいたことかと思えます。

浪江焼ソバ、浪江みそ田楽、手芸コーナー、ひじき煮などの手づくり食品コーナー、旬の野菜、ユニークなドイツ料理など盛り沢山の品々もアツという間に完売！

収益よりも元気の出る交流を目的としたことから、心をこめた激安のため、皆さまに大変喜ばれました。また、集会所内には宮代仮設の方々による手芸品の展示コーナーもあり、抹茶一服のサービスもありました。



そして、フラダンスやゴスペル、子どもたちのじゃんけんゲーム、浪江町民の方による民謡などを楽しみ、ふれあいの時間を過ごしていただきました。

今回のイベントで一番うれしかったことは、宮代仮設住民の方々が、私たちと一緒に考え、積極的に準備してくださったことです。また、このようなイベントを開催できたのは、関東や近隣の小教区、地域の長寿会の皆さまからの愛情いっぱいの多くの協賛品や、CTVCスタッフや遠方からのボランティアさん、お隣の野田町教会の皆様のご協力、さらに、当日ご参加できなかった方々もお祈りで参加してくださっていたからです。

避難されている方々の苦しみを「忘れない」でご支援くださった方々に、スタッフ一同心から感謝しております。そしてこれからもしっかりと手をつないで共に祈り、共に歩いていきたいと願っています。どうぞよろしくお祈りします。

避難されている方々の苦しみを「忘れない」でご支援くださった方々に、スタッフ一同心から感謝しております。そしてこれからもしっかりと手をつないで共に祈り、共に歩いていきたいと願っています。どうぞよろしくお祈りします。

私たちにできることは限られているかも知れませんが、しかし、一服の抹茶の「心からのもてなし」で始まったささやかな活動をベースとして、神さまの救いをお祈りしながら、苦しみに寄り添うことを続けていきたいと思えます。

「今日元気！ きっと明日も元気！ そして、いつも笑顔でいられますように！」

と支え合い、「心の復興」につながってほしいと思えます。

お忙しいところご参加くださいました平賀司教様、イエジ神父様、最後まで見守ってくださいましてありがとうございました。神様が、みんなの愛の手をつなぎ、心を一つにしてくださいました。感謝のうちに。